好奇心をそそる風景

目につくものすべてに好奇心をそそられる

スケールの違いを体感せずにはいられない

思わず登ってしまった

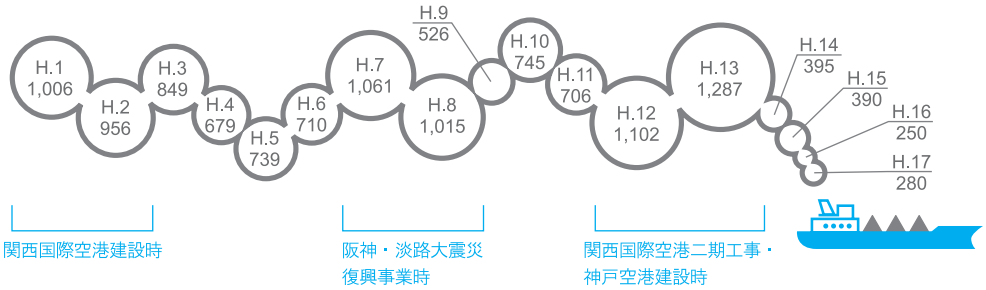
家島の真浦地区の海辺を歩いて行くと、石材を運搬するための「ガット船」が姿を現す。岸壁にその巨大な船体が並んでいる光景はとても迫力がある。さらに足を運ぶと、船舶を修理する「ドック」の姿が見えてくる。ドックには巨大なクレーンが何本もそそり立っていて船の到着を待っている。ドックの中に目を向けると金色に光るスクリューや重厚な碇などの船のパーツが整然と並んでいて美しい。宮地区の海辺を歩いて行くと、入り江にたくさんの小型の漁船が所狭しと停泊している。浜辺には大きな網やカラフルな浮きなどの漁具が干されている。男鹿島では港から島の内側に向かうと広大な採石地が出現する。山が削られた壮大な地形は圧巻だ。そこでは砂煙を上げて走る巨大なダンプカーが走り、岩石を選別するためのベルトコンベアーが音を立てて稼動している。岸壁ではガット船が大きな爪を使って石を掴み船体に積み込んでいる。石の重量で船体が倒れそうなほど傾く光景はとても迫力がある。いえしまの産業の現場は一般的な観光地でよく見られるような「遺産」ではなく、今でも営み続けている「生きた現場」なのだ。そんな現場で僕らは多くの衝動に駆り立てられる。ガット船やダンプカーには乗ってみたくなるし、砕石の丘やベルトコンベアーには登ってみたくなる。船の修理の現場では作業の様子を覗きたくなる。漁で獲れた魚はその場で料理して食べたくなる。いえしまの産業の風景は、僕らの様々な好奇心を掻き立てる強い力を持っている。

いえしまの産業のこれまでとこれから

いえしまの石材産業の歴史は古く、大坂城を築いた際にも石垣にいえしまの石を使ったと伝えられている。いえしまの石材は品質が高く、石を切り出す技術も高く評価されてきたため、日本でも屈指の石材出荷量を誇るようになった。近年では関空や六甲アイランドの埋め立てにいえしまの石材が大量に利用されるなど、これまでの日本の「成長」を支えてきた産業なのである。また、良好な漁場で知られる瀬戸内海の播磨灘で展開される水産業も古くから盛んで、いえしまで獲れる魚介類はブランドとして名を馳せている。そんないえしまの既存の産業も、近年は低迷が続いているという。特に石材は公共事業の縮減など、時代の変化に伴い出荷量が減少しており、それに関わる採石、砕石、海運、鉄工（主に船の修理）などは以前に比べて稼働率が低下しているようだ。そんな折の2005年3月に旧家島町は姫路市に吸収合併されることとなった。新市の計画によると家島地区は「観光の島」という位置づけになっているらしい。観光の島を目指すのであれば、今後どんな「観光」を展開するべきかについて考える時期に来ていると言える。

日本の「成長」を支えてきた採石地

海辺に放置された鉄の爪

石の出荷状況

上段：年度、下段：出荷数量（万m^3）